

石門の発掘調査成果について

～石門の先に見えたもの～

熊本城調査研究センター 芥川 太朗

平成28年熊本地震により石門周辺の石垣が崩落するなどの被害を受けたため、令和4年（2022年）に崩落した石材を回収した。石門に隣接する平櫓を含む一帯では雨水などの水はけが悪く、櫓の部材が劣化するなどの被害があったことから、排水対策の検討が必要だった。排水計画を検討するため、令和6年（2024年）に石門周辺で発掘調査を行った。今回はその調査成果の報告を行う。

1. 石門とは

石門の位置

大小天守の北側にある、石垣の下部に造られたトンネル状の通路。絵図によると天守に近い南側を「中之石門」、北側を「外之石門」と呼称していた。

【中之石門】全長…約 920 cm、開口部…高さ約 160 cm、幅約 150 cm

【外之石門】全長…約 400 cm、開口部…高さ約 145 cm、幅約 117 cm

被災前の石門

平成28年熊本地震以前、石門周辺は一般公開されていないエリアだった。

石門の伝承と説

石門は秘密の抜け穴として、有事の際の脱出ルートという伝承がある。

〔各説〕

- ① 「これは石垣内の水抜き用と戦闘時の出撃口として設けられたものである。」

鈴木 喬『歴史群像 名城シリーズ 熊本城』学研、2000 年

- ② 「谷村計介がこの穴を通して征討軍と連絡を取るために脱出したといい、熊本城の抜け穴との考えもある。しかし、余りにも短く抜けた先が東竹の丸であることから、下の曲輪への短絡通路または水抜きの穴だろう。」

富田紘一『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会、2008 年

- ③ 「城の南側からの襲撃を警戒して北側の脱出経路を用意していたとする説や、本丸からの出撃口とする説、石垣内の排水路として設けた説などが存在し…通路と用水路を兼ねた門だったと考えられます。」

稲葉継陽『図説 日本の城と城下町⑨ 熊本城』創元社、2024 年

江戸時代の石門

「御城内御絵図 明和7年(1770年)」によれば、石門の上部には平御櫓が建てられていた。

「御城図 宝暦5年(1755年)以前」では中之石門に階段の表記があり、外之石門には瓦葺の底が描かれている。

造られた時期(修復の歴史)

石門がいつ造られたかは不明だが石垣築造の変遷からある程度の時期が分かる。

【熊本城石垣変遷】

- ・御裏五階櫓台石垣…熊本城石垣2期(1599年～1600年)
- ・小天守台北東側石垣…熊本城石垣3期(1606年～1607年)
- ・石門石垣(平御櫓台下石垣)…熊本城石垣6期(1632年～1871年)

※石門が造られる前は東西の石垣(御裏五階櫓台石垣・小天守台北東側石垣)によって谷状だった。石門は6期の細川期(1632年～)に造られた可能性。

○肥後国熊本城絵図 元禄15年(1702年)

元禄15年にトキ櫓台石垣と共に石門上部の石垣を修理、積み直している。

- ・トキ櫓下石垣…高さ5間、幅5間5尺孕みのため、孕み部分の積み直し。
- ・石門石垣…高さ5間半、幅9間孕みのため、櫓を解体し石垣の孕み部分を積み直し、櫓を元のとおりに建て直す。
- ・修理にあたって石材を島崎から調達

○また昭和41年11月12日の地震により、石門の構造材12本(石柱3本、石桁1本、天井覆石4本、楣石4本)に亀裂が入る。昭和42年～44年にかけて石門及び上部の石垣を修理している。この際にも島崎から石材を調達している。

※石門内部の石柱には元禄・昭和の修理時期の銘が刻まれている。

2. 熊本地震と石門

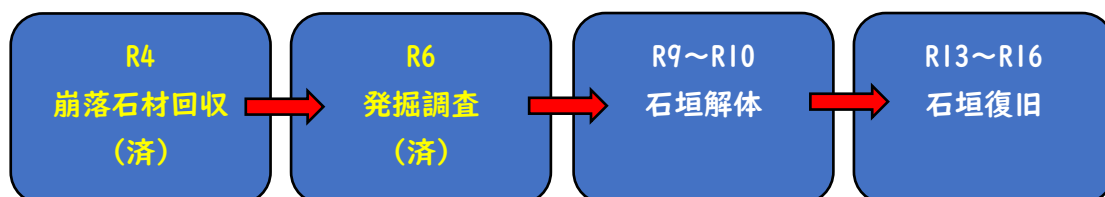
石門の被災状況

石門周辺の6面の石垣から多くの築石が崩落した。石門上部の石垣だけでなく、石門の梁も崩落した。

崩落石材回収

令和4年(2022年)7月から11月にかけて作業し、2008個の築石を回収した。

○今後のスケジュール(予定)



3. 調査の概要

目的と方法

目的は平櫓と石門一帯を含めた範囲での排水計画を検討することである。
そのため、排水計画の検討に必要な情報を得る目的で発掘調査を行った。
7カ所に調査区を設定。現代の造成土より下は手掘りで掘削を進める。

4. 調査の成果

近代の遺物や現代のゴミなどが多く出土。近代のものは陸軍に關係するものも見られる。

根石の確認と石垣改修の痕跡

石門北側石垣にて石垣の根本にあたる「根石」を確認した。また石垣改修の痕跡と考えられる礫群も確認した。

排水遺構について

江戸時代に造られたと思われる石組の排水溝を確認。中之石門から平櫓の方まで延びていくと思われ、当時の排水経路が明らかになった。排水溝には一部を除いて蓋が無かったと思われる。また現在の排水経路とは逆の方向へ流れており、明治10年までには埋没していたと思われる。計測の結果、幅は45cm～70 cm、深さは35cm～20cm、確認した長さは16.5mであった。

5. まとめ

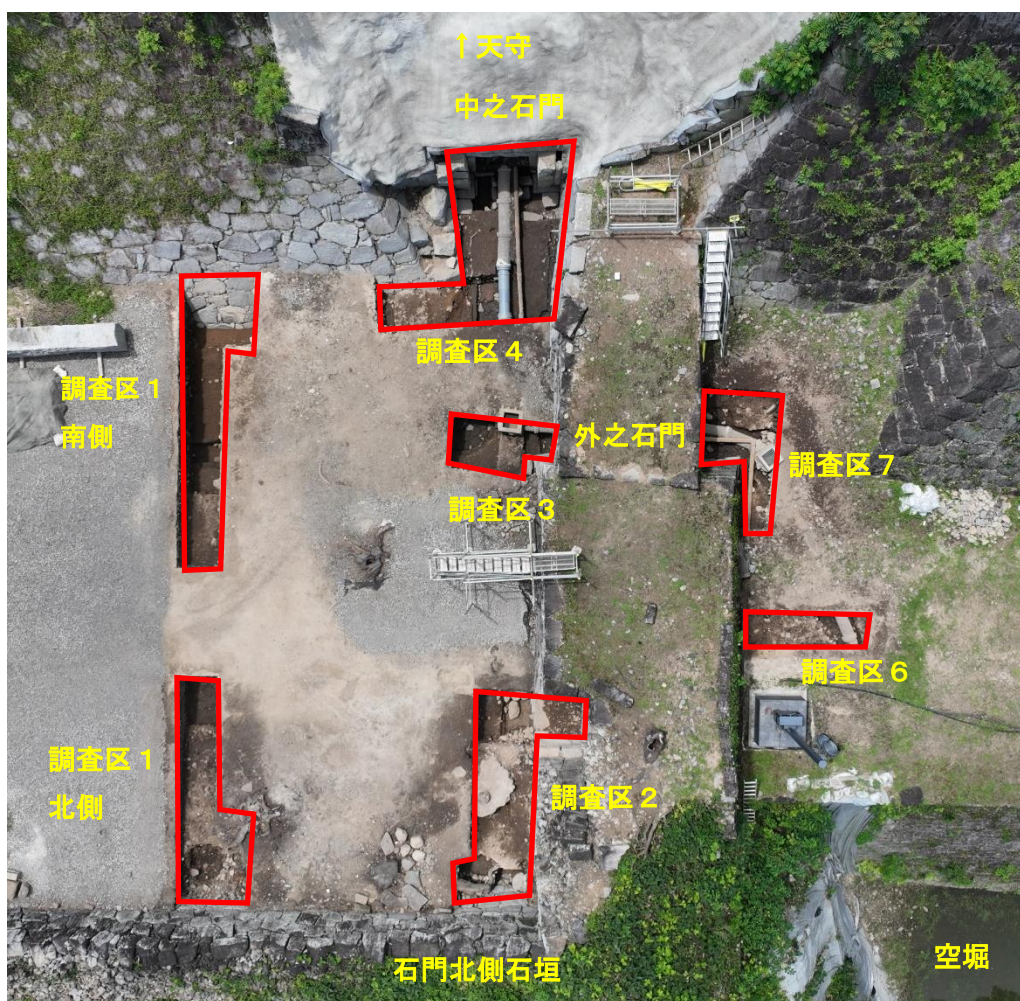
発掘調査によって中之石門の内部に排水溝が設置されていることが明らかとなった。排水溝は中之石門の左側（東側）に寄せて造られていることから、右側（西側）を通路として利用していたと思われる。③の説「通路と用水路を兼ねた門」という説を裏付ける結果となった。

また排水溝には蓋が無かったことから、平櫓側の吐口に向かう途中の表面水の排水も兼ねていたと考えられる。

今回の調査によって当時の排水経路が明らかになったことは、石門及び平櫓周辺の排水経路を検討するうえで非常に重要な成果と考える。



調査区4で確認した石組の排水溝（北から）



調査区配置図（上が南）



現代の排水経路と江戸時代の排水経路（上が南）